
魔法少女リリカルなのはDreamerS

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはDreamers

【Nコード】

N3626BA

【作者名】

暇人

【あらすじ】

両手から零れ落ちる幸せは、落ちた後どこへ向かうのだろう。彼は追いかける。水をすくうように持っていた幸せを叩き落とした人間を憎み、零れて消えた幸せを探し続ける。今はもう届かない、過去の約束を果たしたい一心で。

「次にここに来た時に言うね。私の……気持ち」

魔法少女リリカルなのはDreamers

はじまります。

第1項：力無き夢想家（前書き）

はじめましての方、はじめまして。
そうでない方、こんにちわ。
暇人です。

今作はリリなのStSの二次創作です。
シリアス、残酷な描写、キャラクタに対する偏りのある扱い
などがダメな方、嫌いな方はどうぞ、ブラウザでお戻りください。

さて、今作の基本方針。

「Notハーレム、チート、過剰なアンチ」でございます。
今後本編を読めば察せられるとは思いますが、少々ヒロインの立場
が珍しいですのでご了承ください。

今作は、原作であるTVアニメ「魔法少女リリカルなのはStr
ickers」を視聴し終えていることを推奨します。
原作の場面などをかなりざっくり省いているので、その辺りもご了承
ください。

それでは、どうぞ。
ごゆるりとお楽しみください。

第1項：力無き夢想家

”きょーすけ、早く早く！！”

揺れるブランコに、綺麗な金色の長い髪をした女の子が乗っていた。

”早くおいでよ。背中、押してほしいな”

とても楽しそうに彼女を見ていた俺にそう笑いかけてくれた。
幼馴染と言っても良いくらいには付き合いが長い俺たち。

毎日が楽しくて、彼女という時間は何よりも暖かくて。

自分が笑顔でいられるのは、彼女がいるからだという自覚ももちろんあった。

ありきたりな言葉で言えば、好きだった。

学校の友達のような感情とは全く別の大切な感情。
それは、素敵な……とてもとても素敵な恋だった。

あの日、あんなことさえなければ。

遊んでいた公園の近くで、犯罪者を追跡する時空管理局の局員が戦闘を始めたのだ。

周りに他の民間人が大勢いてもお構いなしに。

聞こえてくる大勢の悲鳴。

唐突に襲ってきた恐怖が身を震わせ、俺と彼女は身を寄せて動けずにいた。

そこに来たのだ。

運が悪かったのか、それとも狙ってきたのか。

追われているように見える人物が、俺たちの前を横切る。

そして通り過ぎた時、悲劇は起きた。

横で「ああ!？」と痛そうな悲鳴が聞こえたかと思えば、横にいたはずの彼女が吹き飛んでいた。

倒れた彼女へと駆け寄ると、靴が赤く濡れた。

よく見れば、彼女の後頭部から大量の液体が流れて液だまりを作っていた。

それが、彼女が吹き飛んだ先にあった塀の、ちょうど石が突き出している部分に頭部が激突してできた傷だと気付くのにさほど時間はかからなかった。

呼びかけても、当然言葉が返ってこない。

人を呼ぼうにも、恐怖と混乱で声の出し方が思い出せない。

ただ、何もできずにその液だまりが広がっていくのを眺めていることしかできなかった。

「ねえ、愛憐ちゃん……起きてよ、ねえ………!!」

この日、俺の幸福と初恋はあっけなく終わりを告げた。
とある管理局員の誤射による事故だった。

誤射をした局員は懲戒免職となっただけだが、そんなことをしても彼女が戻ってくるはずもない。

あまのはら 天野原 あいな 愛夢の笑顔は、二度と見れないのだ。

・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・
・

・
・

・

「——ッ!？」

心臓が飛び出そうなほどの衝撃に一気に意識が覚醒する。
よく見れば自分がベッドから落ちていたことに気付く。

部屋を一周見てようやく自分が今ミッドチルダにある、時空管理局の機動六課と言う部隊の隊舎で生活していることを思い出す。

「まったく、なんつー寝覚めの悪い夢だよ……」

思い出したくもない記憶を夢に見る癖が昔から直らない。

それに関しては諦めてはいたのだが、今日のはいつにもまして生々しく感じられた。

（気分転換に散歩でもするか……）

そう思つて、すぐに着替えて部屋を後にした。

魔法少女リリカルなのはD r e a m e r s
第1幕1項：力無き夢想家

この世界……と言つて正しいのかはわからないが、面倒だ。「世界」と仮定しよう。

この「世界」は、より小さな世界を無数に内包した1つの宇宙……それを俺たちは多元宇宙と呼んでいる。

その多元宇宙を監視し、一定の秩序を保つための法を定め、守護する役割を持つのが『時空管理局』と呼ばれる組織。

基本的に、魔法やその類の文化が無い世界には多元宇宙などの存在だけでなく、管理局の存在なども明かさないことを基本方針にし、1つ1つの世界の繁栄には干渉しないようにしている。

しかし、そんなことをしているのだから、当然仕事が多い。

近年人事部を覗けば毎度毎度人手が足りない、という嘆きの声が聞こえてくる始末である。

そして、時空管理局の活動拠点的な位置にあるのが、第1管理世界ミッドチルダ。

多元宇宙に設けた本局とは別に、大地に腰を下ろした地上本部というものが置かれている世界だ。

この世界は魔法文化が発達しているため、管理局には都合がよかったのだろう。

かくいう俺も、ここで生まれ育ったのだが。

そして俺は今、そのミッドチルダに置かれた機動六課と呼ばれる特殊な部隊の隊舎に身を置いている。

来る日も来る日も訓練と書類仕事などで、局員の中では比較的楽な職場だ。

後輩……と言ってもいい新人たちとも割と良好な関係を築けているのだから、文句などない。

などと思いを巡らせている間に、いつの間にか屋外訓練場にまで足を運んでいたようだ。

.....

「あ、響介さん。おはようございます、今日は早いんですね」

「ええ、おはようございます、高町一尉」

「もー、”なのは”でいいって言ってるのにい」

「いやいや。管理局って半ば軍隊なんで、上官を名前でとかありえないでしょjk」

「へ、jk？」などと、響介と呼ばれた男性の言葉に首をかしげる女性は、呼ばれた通り高町と言う名前。

本名は高町なのは。

階級は一等空尉で現在19歳という若さ。

数多い伝説やら武勇伝を持ち合わせているらしいが、局内外問わずファンが多い美人。

対する男性はなのはに呼ばれた通り響介。
みやふじ きょうすけ
名前は宮藤響介。

階級は3等空士で、27歳と言うなんともまあパツとしない男だ。彼は特に何も持ち合わせてはいないが、悪評がかなりあって、上層部からは厄介者として嫌われている。

「でも、年齢とかだと明らかに響介さんの方が年上ですし……」

「いんや、こういう業界は階級がモノを言うと思うんですが？」

むむむ、と互いに退かずに見つめあっていると、おかしくて吹きだした。

そのまま2人でくく、と笑っていると、彼の顔色はすっかりいつも通りになっていた。

いや、そもそもなのは彼の顔色が悪かったことにすら気付いていなかったかもしれない。

別に彼がそんな些細なことを咎めることなどありえないのだが。

「さて、おふざけはここまでかな。改めておはよう、なのは」

「うん。おはよう、響介さん」

普段は互いに年齢を優先して互いの名を呼び合っている。

これに関してはこの部隊の他のメンバーにも同様のことが言えるのだが。

それから2人はしばらく自主練習と言うことで六課にある陸戦シュミレーターを使って実戦に近い訓練をした。

結果としては彼が一方的に殴られて終わったのだが。

「ひい……ひい……」

「いやあ、良い運動になったね♪」

「ランク制限があっても手加減無しだな……おい」

「ぜーぜー、と膝に両手を付けて荒い息を整える響介は汗が垂れている。

対するなのは爽やかな笑顔でバリアジャケット――魔法で作った防御服――を解除した。

彼女の表情に汗は見当たらない。

「いやあ、響介さんってば地味に攻撃が鋭いんだもん。Aランク狙えるんじゃないですか？」

「馬鹿言うなよ。ガジェット1体壊せないようなカス魔導師がAランク？ 狙うだけでも上の連中が笑うだろ」

時空管理局に所属する魔導師には、各々に適した『ランク』と言うものが存在する。

ランクはアルファベットで示され、最高がS、そこからA、B、C、と言ったように段階が下がっていく。

中にはA Aのようにアルファベットを複数使ったの力量表示の仕方をしている他、+や-を付けられている魔導師もいる。

響介は現在、空戦B＋ランクの魔導師で、防御・補助魔法寄りの後方型として扱われている。

当然、攻撃魔法などは使える物が少なく、単体での戦闘力は低い。

一方でなのは管理局の中でもEーS級の实力者。

空戦S＋ランク保持者で、現在の機動六課に所属するにあたって、

『能力限定』制度により2・5ランクの制限をかけられているため、AAランク扱いとなっている。

B+とAA

ランクだけで見ただけでもその力の差は圧倒的。

しかも、なのはが勧めたAは、他の派生Bランクを飛び越えた物。彼女が言うのだから、それだけの力量を持っているはずなのだが、彼の言う通り、彼はガジェットと呼ばれる機械人形さえ破壊できないのだ。

ガジェットとは、最近多くの世界に出現している謎の多い機械人形の事。

管理局ではこれを『ガジェットドローン』と名付け、ガジェットと呼んでいる。

現在確認されているだけでも3種類ほどあるらしい。

「うーん……攻撃や単体での戦闘能力が魔導師の全てじゃないんだけどなあ」

「それでもだ。組織としてはやっぱり優秀な魔導師。高戦闘能力が見栄えが良いんだよ」

「でも……」

「別にいいだろ。上ランクはいつでも挑戦できるんだし、ランクが低いままの方が能力限定も気にならないから気楽だ」

納得できないのか、響介は不満そうに頬を膨らませたままののに向けて、自嘲的な笑いをする。

そのまま彼はなのはの手を取って一緒に隊舎へと戻っていく。
手を握られたなのはは一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに握り返してついていった。

だが、別に特別な感情は無く、こういった行動を、彼が他の人にもしていることを知っているなのはそれだけでも満足だった。

”自分は独りじゃない”と言う絶対的な安心感が、その手のぬくもりにある気がしたから。

.....

「おはようございます」

「よ。みんな早いな」

隊舎に入り、エントランスに入ると4人組の少年少女がそこにはいた。

そこで響介は記憶を掘り起こして彼らに関して思い出してみる。

青い短髪に緑色の瞳の少女は、名前をスバル・ナカジマと言い、バリバリの前衛タイプ魔導師。
拳とローラーブーツの装備を扱う彼女は『近代ベルカ式』と呼ばれる魔法形態を持つ。

元気が取り柄のムードメーカー的な存在だ。

彼女のポジションは、一般的には”フロントアタッカー”と呼ばれている。

その横、オレンジ色の髪をツインテールにしてまとめている少女は、ティアナ・ランスター。

彼女は前衛でも後衛でもない中衛。

戦闘においてはチームの戦闘方針を司る頭脳の役割を担う”センターガード”と言うポジション。

射撃型で、二丁拳銃のデバイスを扱う彼女は『ミッドチルダ式』の魔法形態。

真面目だが、戦闘においては少々突撃思考があり、癖の強い子だ。

後ろにいる赤い短髪の少年はエリオ・モンディアル。高速戦闘を得意とする前衛魔導師。

槍の形状を持つデバイスを扱う彼は、高機動・高回避力、タイミングを選ばない攻防を求められる”ガードウィング”と言うポジションに属している。

年齢的にもまだ幼く、体格も小柄ながら『近代ベルカ式』を扱う真面目で初心な少年。

さらに彼の横に、小さな龍を連れているのがキャロル・ルシエ。召喚・儀式魔法と補助魔法を担当するどこからどう見ても後衛タイプの魔導師。

砲撃魔法などの高火力は扱えないが、その分味方への補助魔法が充実しているため、それを活かせる”フルバック”のポジションに立つ。

エリオと同じく幼いが、魔導師としては立派で将来有望な人材。おっとりしており、いつも朗らかで心優しい少女。

ちなみにデバイスと言う物は、簡単に言えば魔導師を魔導師たらし

めている象徴のようなものだ。

個人が持つ魔導資質を、端末を通して魔法へと変換し事象とさせる魔法発動のための補助器具。

例外として、魔導基盤が単純な魔法などはある程度訓練を積みればデバイスがなくなるとも発動できる。

さらに稀に、高度な魔法をデバイス無しで発動できる人もいるが、そんな人はいないに等しい。

(……だったかな)

思い出してすぐ、エリオが響介に寄って来る。

この部隊の前線メンバーは男が少ないため、すぐに仲良くなったのだ。

「これから今日の早朝練習です。今日は参加されるんですか？」

「あーいや、今日はパスだ。実はさっきなのはと自主訓練したばかりなんでね」

すると彼のカミングアウトに新人4人は表情が強張った。

この機動六課に配属されてからしばらく経つ彼らは、なのはの訓練の強烈さを知っている。

だからマンツーマンで自主練をした、と聞いた時驚いたのである。

ふと振り返ってみると、響介の後ろにいたなのはは頬をヒクヒクさせていた。

「どした？」

「あ……いやあ……あはは」

「そういえばなのはさん、この時間にここにいて大丈夫なんですか？」

乾いた笑いをしていたなのはに、スバルが直球で問いかける。彼はそれですべてを理解した。

《お前……早朝訓練あるなら言えよ》

《ごめんごめん……響介さんとの練習って楽しくて、ね》

魔導師間での声を出さないやり取り、いわゆる念話で呆れたように声をかけると苦笑が返ってくる。念話はそれだけで、あとは彼女が駆け足で再び陸戦シュミレーターの下へと戻っていった。

「……ま、お前らも頑張れよ」

「響介さんだってB＋ランクで私たちと対して変わりませんよね」

「ティ、ティアナ……お前は遠慮と言う言葉を知らんのか」

「冗談ですよ。では、失礼します」

なのはの後を追いかけるように、ティアナの言葉を合図にして駆けていく4人。

そんな彼らを見送った彼は悠々とした足取りで自室へと向かった。

「さて、俺もボチボチ仕事するか……」

その表情には、先ほどの明るさはどこにもない。
ただ凍るように冷たい瞳が、床を見つめているだけ。

（全ての世界から、次元犯罪が消えてなくなればいいのに）

彼はこの機動六課の中では特殊な役割を担っており、一応前線メン
バーではあるのだが独立した行動をとることがある程度許されてい
る。

そんな彼は、叶いもしない望みを頭の中で繰り返しながら最後に強
く望む。

「そうすれば、こんな組織は消えてなくなるんだから……」

固く握られた拳は、彼の願いの強さを。

暗く濁った瞳は、彼の持つ感情の色を。

カツカツとなる足音は、まるで時計の針のように。

「彼」を物語っていた。

第1項：力無き夢想家（後書き）

まだ1話ですから、ヒロインは不明。
その内すぐにわかります。

さて、今作はTVアニメ版で言う第4話辺りから始まっております。
必要に応じて、多少の設定や時間軸を変更させてもらっています。
今後も「アニメと違う」「設定が違う」という場面があるかと思いますが、高確率で仕様です。

たまに私のミスもあつたりするので面倒ですが。

呼んでくださった皆様が、少しでも「続きが読みたい」と思えるような作品作りをしていきたいと思っておりますので、

どうか、今後も私暇人をよろしくお願いします。

第2項：スコープの向こう側（前書き）

今回の内容は、アニメ版の第4、5話に相当します。

第2項：スコープの向こう側

高町なのは戦技教導官らによる、機動六課前線フォワード部隊の新人育成。

早朝の部がなんとか終わりを告げると、新人の内の1人であるスバル・ナカジマの自作デバイスが破損した。

それを見たのはは、これまでの訓練内容と新人の実力を鑑みて彼らに以前から用意していた新デバイスを与えることを決めた。

これは、デバイスが破損したスバルだけでなく他の新人も同様だ。

訓練終了から20分ほど経った後、一同はデバイスルームに集合していた。

（デバイスルームとは、時空管理局所属の魔導師が扱う魔導端末の修理・調整・開発と、デバイスに関するあらゆる作業を一括して行える設備を置いている空間のことである。

通常運営は各部隊の業務担当が運営をしているのだが、いろいろな部隊に点在しているデバイスに関しての専門知識と資格を持っている者（通称：デバイスマイスター）がいる場合はその人物を中心に運営する。

部隊の設備で、司令室の次に重要視されている空間だけに常に最新の状態で保たれている）

「これが、私たちの新デバイスですか!？」

「ええ。設計主任は私、シャリオ・フィニーノ。協力は分隊長のお

2人と、レイジングハートとリイン曹長!!」

部屋の中央にある台座に浮遊している4つのアクセサリ。
ネックレス、カード、腕輪、腕時計。

「外見が以前と変わらない機体もありますけど、中身はぜんぜん違うです」

えへん、と胸を張って言う彼女は先ほどシャリオ（以後シャーリー）から紹介があったリイン。

彼女はリインフォース？と言って、この機動六課の部隊長である八神はやての所持するユニゾンデバイス。

他のA I搭載型とは全く異なり、一個の生命体に近い存在でありながら所有者と一体となることで真価を発揮することも可能なデバイス。

これ以上は長くなるので割愛させてもらおう。

彼女が言うには、この4機は六課前線メンバーの技術と経験を余すことなく使い作り上げた文句なしに最高の機体らしい。

そのくせ、これまでの訓練内容から得たデータを元に各々の癖に合わせたチェーンも施されている。

その後、シャーリーの説明によると性能に3段階のリミッターをかけており、今後の訓練で実力をつけていくのと並行してそのリミッターを解除していくようだ。

同時にスバルらはリミッターの話のおまけとして、なのはをはじめ、隊長ら全員にデバイスと肉体双方に制限がかけられていることを知る。

そしてのんびり訓練の中で調整していく、と言われた時。

耳を突き刺すようなアラートが隊舎内に鳴り響いた。

第一種警戒態勢を知らせる、叶うのなら聞きたくなかった音だった。

.....

その頃自室にいた響介は、鳴り響くアラートの中平然とした面持ちで服を着替えていた。
廊下の外がバタバタと騒がしいのも気にならず、急ぐことなく上着を羽織る。

『急がなくていいんですか、マスター？』

「急ぐ必要は全くないよ。どうせ移動中のヘリの中でブリーフィングするんだから、いちいち自分で情報を得る時間が惜しい」

机に置いてあった自身のデバイスであるエリヴェルド・ブヴズの疑問も切り捨てる。

待機形態である真紅の指輪を右手の中指に通して、コート内側の胸ポケットには1枚の写真を入れた。

大事にコートの上から写真に手を置くと、大きく呼吸してから指輪にキスをした。

「さて、行こうか。俺の愛しのエリー」

『マスターのお役に立てること、至高の喜びです。愛しています、

マスター』

互いの信頼を確かめ合うと、ようやく響介は自室を出た。

茶短髪に、長い前髪ともみあげ。

機動六課の制服の上から羽織った、内側にポケットが多い紺色のトレンチコート。

袖から見える手は黒い牛皮の手袋で覆われ、靴は他の局員とは異なり黒いブーツ。

普段のひょうきんさなどどこ吹く風、と言うほど雰囲気は逆転している。

これは彼のいつものことだった。

着替え終えた彼が向かう先は直接ヘリポート。

死んだ魚のような目をしたまま、彼はそこに待機していたヘリに乗り込んだ。

「お待ちしておりました、宮藤さん」

「飛ばせ。八神はやてから何か連絡があった場合の対処はすでに用意してあるだろう？」

「心得ております。ご安心を」

妙に体格が良く威圧的な男性局員が響介を迎えたが、彼は何も特別な反応を見せない。

むしろその男性がヘリに乗って待機しているのが当然、と言わんばかりだ。

徐々に加速していくプロペラの回転。
浮上する機体。

彼が機動六課の隊舎から飛び去った後、入れ替わるようにしてヘリポートに次のヘリが用意される。

そこに乗り込んだのは、なのはをはじめとした新人らとリインフォース？。

そんな彼女らを上空から見下ろしていた響介の瞳には、なんの感情も見つけられない。

（さあ、この初出勤がどう影響するんだろうな。高町なのは……お前の翼は俺が折る。今度こそ、完膚なきまでに）

「宮藤さん、到着しました。後方からみなさんが来てますんで、面倒なやり取りが始まる前に出撃を」

「了解だ。ここまでの移動に感謝する……今後も頼むよ」

「任務ですからお気になさらず」

「ご苦労さん。あの小娘に文句を言われないよう連絡を入れておいてくれ」

はい、という短い返事が返ってきたことを確認した彼は、開いた後

方ハッチから颯爽と飛び降りる。

強風が服や髪を激しく揺らす中、響介は右手を突出してエリーを起動させた。

一瞬体が光ったかと思えば、何も変化の無いままの姿で飛行魔法を発動。

彼はバリアジャケットを装着せず、代わりに着ている自前の服をフイールド系防御魔法で強化しているのだ。

ちなみに彼は一応空戦魔導師のため、飛行魔法は扱える。

一般的に見て飛行魔法が扱える空戦魔導師は、陸戦魔導師よりも高い格付けを受ける。

ただし、響介の場合は飛行できたとしても上層部に嫌われているため陸戦魔導師と同じ扱いを受けている。

そんな事実をいちいち思い出して落胆していた間に、彼はアラートの原因となった現場の横に広がる森に足を付けた。

「山岳を走るリニアレールに古代遺失物のレリックがある、と。ガジェットもよくそんな場所のを見つけてくれるもんだ」

『ガジェットがリニアを襲いコントロールを奪取。その際に他のガジェットが貨物内を搜索して確保……あまりにも単調な作業過ぎています』

「本当にレリックを集める気があるのかねえ……」

『確かに行き当たりばったり感はありませんね』

現場の状況を把握しながら、同時にガジェットの目的の無い行動方

針に呆れていた。

その一方で目の前にそびえる壁……とも見えるほどの山。
高い土壁の上、視界のギリギリの範囲でリニアレールを視認する。

すると彼は足元と体の背面に鳶色とびいろの魔法陣を展開した。

トイボックス
「異空間弾倉、展開」

『展開開始。これより私はゲート維持のために半自動補助へと移行します』

「頼んだぜ」

それからしばらくの沈黙の後、左手で半ば大げさに前髪を掻き上げた響介が歯をむき出しにして笑う。

「さあ、お仕事の時間だ。依頼者クライアントの要望に答えつつ、この戦場を楽しもうじゃないか」

背面に展開された魔法陣へと振り返り、両腕を入れて取り出したのは、黒光りする鉄の塊だった。

.....

「うん、スバルたちも良い調子みたいだ」

『空も飛行型などの編成以外は目立った危険性はありませんね』

「とはいえ、こっちは数が多い。まるで私たちを空で足止めしたいみたいに、あからさまだ」

『地上、5時の方角より転送術式の展開を確認』

リニアレールを問題なく制圧していくスバル達を見て安心するなのはとフェイト。

そんな2人は、フェイトのデバイスであるバルディッシュの報告に背筋を凍らせた。

「なのは、防御急いで!!」

フェイトが叫ぶまでもなく、なのははすぐにシールドを目の前で展開した。

直後展開したシールドを通して全身に伝わる強烈な衝撃。

一点に魔力を集中させてようやく弾くことに成功した。

「今のつて、まさか——」

『次、来ます』

レイジングハートの言葉で再びシールドを展開したなのはは、念を入れて3重にシールドを展開する。

これでそそぐ魔力を集中してやれば大丈夫だろう、と安心していたのはは目の前の光景にギョツとした。

まるでガラスが割れるような勢いで1枚目と2枚目のシールドが砕け散ったのだ。

思わずありったけの力を込めて最後の1枚で耐え抜いたが、頬には汗が伝う。

「見えた？ フェイトちゃん」

「うん。さっきのも今のも、間違いなく銃弾……質量兵器だった」

質量兵器。

それは一般向けの言葉で言うのなら拳銃やロケットミサイル、爆弾などの総称だ。

時空管理局の掲げる方針では、これの使用を一切禁じている。

理由はいくつか仮説があり、

- ・単純に殺傷設定ができる魔法のみを使うことで安全性の向上を図るため
- ・密輸などへの牽制をし、世に出回るのを防ぐことで治安維持の簡易化を図るため
- ・魔法主体の管理局に対し、質量兵器を用いて武装蜂起する事を防ぐため
- ・管理局が質量兵器を押収し、他世界への侵攻の糧にするため

などなど。

特に時空管理局という組織を嫌う者たちの間では、3番目4番目の理由を信じている者が多い。

そして、たった今なのはを襲ったのは長く先の細くなっていた弾。あまり質量兵器に関して知識を持っていないなのはでさえ分かった。

「今の、長距離狙撃用ライフルの弾だったよね」

「うん。明らかになのはを狙ってた」

2度あることは3度ある、とよく言われるので警戒を怠らないようにはしているが、こない。

眼下ではすでにリニアールが停止しそうな雰囲気ではあるのだが、まだ空のガジェットが残っていた。

「まずい。早くガジェットを殲滅しないと、レリックの回収に支障が出るかも」

「なのはは身を守ることに集中してて。ガジェットは私がやるから」

「でも……」

「お願い。なのはがまた墜ちるところなんて……見たくないから」

そこまで言われてしまうと、頷くしか選択肢がないのは。

それを確認したフェイトが、ガジェットへ向かおうとした時。

『地上3時の方向、きます』

「!」

突如反応を見せたバルディッシュに、驚きながら反応したフェイト

は体をぐつとそらして回避する。

同時に数発の弾丸が空を裂き、フェイトを襲う。

「——ッ」

だが、頬と腹部にわずかな痛みを感じた。

「なのは……やっぱりガジェットはラインやフォワードのみんなに任せた方がいいかもしれない」

「じゃあ、私たちで地上へ？」

フェイトの頬からは血が垂れていて、左わき腹のバリアジャケットは綺麗に裂けてそこからも少量の血が出ていた。

多少苦い顔を見せてはいるが、その程度の負傷で退くほど軟なエースではない。

止血として応急処置的な簡易治癒を施しているフェイトの代わりに、なのはが本部へと通信をつなぐ。

「こちらスターズ1、地上より質量兵器と思われる武力によって奇襲を受けました。私とライトニング1は、これよりそちらの制圧に向かいます」

<質量兵器やて！？ まだ空にガジェットは残つとるけど……ええやろ。ただし、十分に気を付けてな>

「了解しました」

八神はやてとの通信を終えた2人は、すぐに先ほどの弾丸が飛んできた先へと接近する。

その場に撃った本人がいる証拠に、愚かにも撃ち落とそうとありえない装填速度での弾幕が敷かれていた。

フィールド系・シールド系の防御魔法に全神経を集中して突破するなのはとフェイト。

おかげで傷を負うことなく地上へと降りられそうだが、となのはが思った瞬間。

あれほど激しかったはずの弾幕がピタリと収まった。

あまりにも唐突だったために警戒して一度下降を中断して停止した2人。

だが、しばらく待ってみて状況に変化がなさそうだと判断した2人はそのまま森の中へと足を付けた。

「なんだったんだろう。でも、ここまで降りてくるのにだいぶ魔力を消費しちゃったけど、大丈夫だよね」

「油断は禁物。まだ狙撃犯がこの周辺に潜んでるかもしれない。わざわざ私たちを狙ったんだから、相当な自信家かつ自信に見合うだけの實力を持つてると思っている」

「そうだね……私、最近現場での緊張感が足りてないのかも」

「自覚があるなら、今からでも直せるよ。なのはなら大丈夫」

ジリジリと移動し、互いの背中を合わせて死角を限りなく減らす。先ほどまでのガジェットを撃破する単純な任務とは打って変わって、今の緊張感とは2人にとって久々だった。

すると、少し離れた所で銃声と男性の音が響く。

そのおかげか2人は一気に移動する、という命令を体に与えることができた。

「まさか、誰か巻き込まれた!？」

「一般人は考えにくいけど……」

先ほどから、次から次へと目まぐるしく変わる状況に混乱を隠せない。

機動六課に出向して初の出勤が、これほど緊迫したものになるとは思ってもみなかった。

草木を掻き分けて走った先、少し開けた所に男性はいた。

「つて、響介さん!？」

「大丈夫ですか!？ その怪我は!!」

そこには、出血している左腹部を抑えて倒れていた宮藤響介がいた。一緒に出勤したわけでもなく、全く連絡がなかったはずの彼が負傷して倒れている。

今度こそ、なのはは混乱した。

「え、へ!？ なんで響介さんが……嘘……」

「なの、は……」

「大丈夫！？ あんまり喋らない方が……」

「五月蠅いぞ。深呼吸しろ……俺はまだ、生きてる……から」

パニックを起こしていたなのはに、かすれた声で響介が落ち着くように促す。

彼に言われた通り深呼吸して、大きく息を吐くと彼女はようやく頭が冷えてきた。

「響介さん、とりあえずヴァイス陸曹に頼んでヘリで運んでもらいますから、もう少し我慢できますか」

「ああ……何も聞かないんだな」

「答えてくれるんですか？」

「答えられることだけ……ならな」

通信で真っ先にヴァイスのヘリを呼び戻すフェイトに、響介は問う。そんな彼にフェイトは、執務官として相対し困ったように息を吐いた。

なのはの簡易治癒魔法で止血はしたが、疑問は次から次へと湧いてくる。

「じゃあ、1つだけお聞きします。ここへの出動は理解できますが、戦線に参加せずこちらの森で何を？」

「俺は、別口でこっちにきた。んで、森の中から空へ狙撃してるやつを見つけて……追跡してこの様だ」

自分の身の程をわきまえずに独断専行した結果これだ、と自分を蔑むように息を吐く響介。

響介の言う”別口”がなんなのが気にはなったが尋ねられそうにない空気を察したフェイト。

2人はそのまま沈黙して会話が成立しなくなってしまった。

それからヘリが来るまでの数分間、なのはによる嵐のような質問攻めに彼は負傷を理由に回答を避け続けた。

《エリー、データは？》

『良い内容が取れてます。すでに先方にお送りしました』

《そうか……今日は少し疲れた。お前も休んでいいぞ》

『お気遣い、ありがとうございます』

そんななのはの目をかいくぐって、響介はエリーを待機形態の指輪に戻す。

そしてそのまま体の力を抜いた。

.....

<ドクター、刻印ナンバー9のレリックは管理局が回収しましたが

.....>

「構わないさ。今回は実に良いデータが取れたからね。この案件は実に素晴らしい……」

このリニアレールでの攻防を観戦している人物がいた。
どこの空間にいるのかさえ不明な屋内。

怪しげな照明が照らすその部屋の中心に立つ人物の前では、大きなモニターが先ほどの戦闘を映し出していた。

ガジェット1型を易々と撃破し、自身のスキルで作った足場を駆け回るスバル。

AMFを容易に攻略し、魔力弾だというのに的確にスバルが撃破したものと同型のガジェットを粉碎するティアナ。

龍召喚を成功させ、巧みに補助魔法で援護を続けるキャロ。

キャロの援護を受け、巨大な3型ガジェットを一刀両断するエリオ。

加えて3人。

高機動・高火力でガジェット2型を薙ぎ払うのは。

高機動・良判断で同じくガジェット2型を切り裂くフェイト。

上空とリニアレールの様子をちらちらと見ながら森の中を駆け回っていた響介。

「彼らの良質なデータを得られたのだから、レリックの1つぐらいは安いものさ。彼には感謝しないとね」

「はぁ……ですが、いつまでも彼に、好きに動いてもらって良いのですか？>

「別になんの支障もない。管理局そのものの情報はドゥーエが流してくれている。それに、彼には先の行動予定を教える……上手く動いてくれるさ」

<裏切る可能性があるのでは？>

すると、ドクターと呼ばれていた男性は愉快そうにククク、と喉を鳴らして笑う。

通信画面の向こうに立つ、報告をしていた通信相手の女性は眉をひそめた。

「それこそ心配はない。彼の目的は私の技術無しでは成り立たないのだから、彼が私に反旗を翻すことなどないのだよ」

<……そこまで言うのでしたら、構いません。妹たちも文句はないでしょう>

通信相手の女性は、諦めたかのようにため息をつきながら通信を閉じた。

残された男性は再びモニターへと目を向けて笑う。

「プロジェクトFの残滓、プロトゼロ、夜天の主、エースオブエース。本来なら今すぐにでも手にしたいところだが、時期尚早だ。今後は彼の働き次第……期待しているよ、エーゲルハイド君」

彼の視線は、真っ直ぐに響介を見つめていた。

第2項：スコープの向こう側（後書き）

かなり、ざっくりと本編をカットしてますんで、進むのが速いですw
でもその分、オリジナル展開や内容、キャラを大事にしていくつもりですので、よろしくお願いします。

読んでくださった皆様のご感想を、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3626ba/>

魔法少女リリカルなのはDreamerS

2012年1月12日17時50分発行